



¥0

イラストレーション 玉川重機



# 黒蜜

## 小池昌代

二歳のとき、海人<sup>かいと</sup>はおむつのCMでデビューした。その頃住んでいた家の近くの、コンビニでスカウトされたのだ。そのときのことは、母親が、繰り返し周囲に話したので、海人も自然、覚えてしまった。

「ベビーカーを押して、近所のコンビニに入ったんです。よくあることです。なんの考えもなしに。そしたら、そこにいた女子高校生たちが、海人を見た瞬間、かわいーちよーかわいーって黄色い声をはりあげて。店のなかは、そりやあ大変な騒ぎ。そこに偶然、CMの制作会社の方が居合わせたというわけで。ええ、土下座して頼まれたんです。この子の頭の上には、天使の輪が見えるって。見えるひとには見えるんですわ」

今ではもう、海人自身が、その場面を見たような気分になっている。話は細部が作り替えられ、比喩もいつそう洗練されて、どの部分がほんとうで、どの部分が作り物なのか、母が死んだ今となっては確かめることもできない。そんなものさ、と海人は思う。「伝説」なんて、作られるもの。過去だって作ってどこが悪い。

確かに海人には天使の輪があった。だがそれがどこまで通用するか。周囲の大人たちは残酷な気持ちで見物している。彼のチャームポイントである深いえくぼが、四十、五十になったとき、どうなってるか。しかしそもそも誰一人、四十、五十になった海人を想像することができない。そういうとき、子役は大成しないというジンクスが、ちらっとみんなの頭をよぎる。

海人をそうして芸能界に引き入れた母は、三年前、早朝の

撮影現場で、臨時に作られたセットの建物から転落して亡くなった。即死だった。そんなところに、まさか海人の母親がのぼっていたとは、誰もが予想できないことだった。母にしてみれば、前もって撮影現場をチェックしておくことは、マネージャーとして、至極当たり前のこと。安全性の確認と自らの好奇心も多少は手伝って、まだ誰も来ていない「大邸宅」のセットの二階に、足を踏み入れてみたのだった。

建物はまだ準備段階で、足場の組み方がゆるかったものとみえる。一人一人が乗っただけで、あつという間に崩れ落ち、彼女は鉄柱の下敷きになった。押しの強い母親を嫌っているひとは多かったのだ、誰かが彼女を突き落としたのだといううわさが、生々しく語られもした。でも結局は、事故死とされた。

そしてこのことは、一切、マスコミには知らされなかった。人気ドラマに影を落としてはいけない。そんなところへあがったほうも悪いが、危険を放置していた制作側も悪い。責任を問われたら面倒だというのがひとつ。そして彼らが何よりも恐れたのは、大人気の海人に、よけいなうわさがたち、イメージに傷がつくことである。

あのとき海人はまだ五歳だった。母が死んでも泣かなかった。今に至るまで、一滴も涙をこぼしていない。感覚が麻痺してしまっただのか、悲しいという感情がわからなくなった。悲しいよりもおかしいのだ。解放されたという気持ちもある。いたひとが突然いなくなった。自分は一人、今日も母親が死んだ現場で、こうして楽しく仕事をしている。変と言えばかなり変。くっくと笑う。鳩みたいに。

五十年に一人の天才子役。海人はいま、世間のひとから、そんなふうに言われている。とんとんとん。スタジオに付設された楽屋のドアが叩かれる。

「海人くん、スタンバイよろしくお願いします」

アシスタントディレクターの鷹堀<sup>たかぼり</sup>さんが、海人の出番を知らせてきた。楽屋はもちろん、海人一人のために用意されたもの。テーブルの上には、お茶やカルピスソーダ、チョコレート、おせんべい、飴、くだもの、サンドイッチのたぐいが山のように置いてある。だが海人は、そのほんの少しに手をつけただけだ。

せりふは、すでにはいつている。あとはできるだけ無心になること。自分自身を消す、このひとりきりの時間を、八歳の海人は大切なものと考えている。ほんの数秒でいい。何者でもない、真っ白な自分になる——これは、演技の前の儀式のようなものだ。

鷹堀さんに名を呼ばれた瞬間、海人は目をつぶりその儀式を執り行った。そうして暗闇のなかの小さな自分が、消えてしまふところをイメージした。母親の胎内にいたころの芽のような自分。ああ、芽のような自分。もっと遡って、消滅、ぱつ。

目を開ける。鏡を見る。自分が写っている。にかつと笑う。深いえくぼ。最高の笑顔だ。うっとりする。かつこいい。おれは世界で一番かつこいい。そう思った勢いでドアを開ける。ドアの外には、鷹堀さんがいて、出て来た海人を、まぶしい者のように見た。

「お迎えにあがりました」

来年、三十になるこのひとは、まだ若者らしさを顔に残した、ごく平凡な男性だが、腰が妙に低く、いつも何かにおびえているような感じがある。もしかししたら、何か悪いことをしているのかもしれない。最近、海人のまわりでは、突然警察に捕まって、この世界から姿を消していく人がやたらと多い。ほとんどが薬物の常習者。

鷹堀さんの目は、最近とみに、きよろきよろと落ち着かない。叱られる前の子供のようだ。何をいったい怖がっているのか。海人はつい、残忍な気持ちになって、そんな彼をいじめてやりたくなる。

鷹堀さんってさあ、最近、ちょっと様子が変なんだよね。人の目をはっきり見ない。え？前から？それって結構感じ悪いよ。おれ、どうも、あわなくて。たとえば監督に、そんな一言をつぶやいてみたらどうか。気に入らないひとを追いかうことなんて、今の海人には簡単なことなのだ。けどそれは、頭のなかで思うだけで、決して行動には移さない。海人はぱっと椅子から立ち上がる。

さあ、いくぞ。本番だ。

八歳の、この子供のなかに、そのとき強い北風が吹きあがる。海人はこの瞬間に、役の「拓也」になりかわる。皮膚があわだち、毛穴が開き、身体の奥から、名前のつけられない快感のようなものがわきあがる。監督が、共演者が、おれを待っている。おれを照らすためにライトが待っている。こんなときの海人は、確かに誰が見ても、異様なオーラを放つ、天才子役に違いなかった。

シーン3。学校の休み時間。教室で、拓也は級友の裕美子と、犯人像について話し合う。

拓也は裕美子という美少女とともに、殺人事件の犯人を、子供探偵さながらに追い詰めていくという役どころ。相手役の少女は、演技の経験がまるでない素人だという。オーディションで選ばれたわけではなく、監督が町を歩いていてスカウトしたらしい。

海人と鷹堀さんがスタジオにはいると、空気がふっと変わり、みんながいつせいに海人を見た。あちらこちらから、おはようございますという声があがる。教室のセットには、裕美子役らしき少女が先に来っていた。

おはようございます。海人にはこりともせず少女に挨拶し

た。自分のほうから挨拶したことが、海人には珍しく自分でも新鮮だ。

こんには、と少女が言う。スタジオの時計が午後四時半をさしている。二人は目を見合わせて頭をさげた。

「こちら、佐藤さんです」

鷹堀さんが少女を海人に紹介した。海人はその名を、聞いてすぐに忘れた。

「こちらは海人くん。もちろん、知ってるよね」

少女は頷くが、目が笑わない。

海人は頭のなかで、楽屋に置いてきた台本の頁をめくった。

拓也と裕美子、放課後の教室で二人きりになる。拓也、おもむろに裕美子に語りかける。

「なあ、裕美子、さいきん、松崎先生、おかしくねえか」

「そうなの。わたしも変だと思っているの」

「だけど、先生が犯人なんて」

「まだ決まったわけじゃないわ。でも先生だからって、悪いことをしないというわけじゃないわよ」

「ショックだよ」

「そうね、でも仕方ない。たとえそうでも真実は見極めなくちゃ」

「なんでおまえ、松崎が怪しいと思うんだ」

「ネクタイもしたことのない、かまわないひとが、このところ、急におしゃれになったわ。考えてみて。あの日からよ」

「あの日からか。よく見てるな」

「あたしはおしゃれに敏感だもの。あなたとは違うわ」

この二人、互いに言いたいことを言い合いながら、ラブラブであるという設定になっている。海人のほうは、毎回のことながら、一回で演技にOKが出た。少女のほうは、どこことなしに不器用な感じがあつて、幾度か監督にやり直しをさせられた。しかし彼女は賢くて、注意されると、二度目にはきつとそれをクリアし、三度目には、さらによくなった。一を

聞けば、十も二十も三十も知り、自分で考えて肉体で表現する。顔つきだって、九歳にしては、どきつとするほど大人びている。涼しい視線が海人に注がれるとき、海人は、その目に吸い込まれるような気持ちになった。

ずっと少女がやり直しをさせられて、シーン3が永遠に続けばよいのに。海人はそう願う。しかし少女は、短い間に、集中力の高いすばらしい演技をこなし、シーン3は、予定の時間をだいぶ残して、早々に終了した。

「お疲れ様でした」

鷹堀さんが二人をねぎらった。

「よく何度もがんばったね。佐藤さん。海人くんは、いつもながらあっぱれだ。ファンの人たちが、出口のあたりにいっぱいいる。帰りは裏口から車でね。スタッフが社長宅まで送りますから」

海人は母親亡きあと、所属事務所の社長宅に、一室を与えられて住んでいる。

「きょうはあんみつの差し入れがあるんです。よかつたらどうぞ、食べてってください」

「あんみつ？ 珍しいね。誰からの？」

海人には、いつも毎回、見知らぬひとからの食べきれないほどの差し入れがある。食べる前からもうお腹がいっぱいだ。

「今回、老舗の甘味処が、撮影に協力してくれましてね、お店のほうもこれから使わせてもらうんですが、今日はそこから、みなさんへって」

スタジオを出た待合室のようなところに、女性スタッフがテーブルを並べ、あんみつのカップやお茶を用意していた。

「お疲れ様でしたあー」

大きな声、高いテンション。海人のとなりで、少女が一瞬身を固くしたのがわかる。彼女はいつも、静かな家で暮らしているの、撮影現場の異様に高揚した雰囲気、さきほどから驚くばかりである。

赤ん坊のときから、ここの空気を吸って大きくなった海人には、むしろこういうのが日常であつて、学校だとか社長夫

妻の家のほうが、しんどい演技を求められる場所になっている。本番以外は、できるものなら、誰ともしやべらず、笑いもせず、無口に座っていたかった。一人になれる楽屋だけが、唯一、自分に戻れる場所だ。

「黒蜜にする？ 白蜜にする？」

ヒトというぬいぐるみを着たような、さきほどのお姉さんが、二人に向かって優しく聞く。

少女は即座に黒蜜と言う。海人は黒蜜を知らなかったのだ、どんなものだろうと想像した。白い蜜と黒い蜜。色が違うことはわかるけれども、死んでしまったお母さんに、そんなものを食べさせてもらったことはない。もちろん、事務所の社長夫妻にも。

「渋い選択だね、黒蜜、わかったわ！」

お姉さんは、いちいち大声で叫びながら、その場を懸命に盛り上げる。

「海人くんは？」

「おれも黒蜜」

その黒蜜が、とろりとかった寒天を食べて、海人はいきなり、うまっと言った。

初めて少女が笑ったので、海人は大変な偉業をなしとげたような気持ちになった。

「うめえなあ、これ」

こんなものを、わざわざうまいという少年を、少女は珍しいもののように、眺めやった。

「白蜜より、こくがあるじゃない、だから、わたし、黒蜜のほうが好き」

「こく」という言葉が、心にしみてきて、海人は少女の横顔を見た。

「……おれ、初めてだよ、黒蜜って」

思わず、ほんとうのことを言ってしまう。

「うちではいつも黒蜜なのよ。おばあちゃんが大好きだから」

涼やかな少女の口元が、サイコロ状の寒天をするするすとす

いこんでいく。

少女は、テレビを付けねばうるさいほど出てくる、わざとらしい演技をするこの子役が、実は大、大、大嫌いであつたけれど、その子がいま、目の前にいるという不思議さに取り込まれて、どこがどうしてなぜ嫌いなのかを、じつくり観察する体勢になっていた。

黒蜜が初めてだと言う。それを聞いて、少しだけだが、かわいそうに思う。

さきほど、初めて撮影を終えた少女は、はつきりと決めたのである。自分は今、これを最後に、この場所へは来ないということ。少女はもつと綺麗な空気が吸いたかつたし、空を見たり木を見たり花を見たりしたかつた。友達にも会いたかつたし、その友達と普通に話をしたかつた。道をぼんやり一人で歩きたかつた。ほとんど学校にも行けないような状態の海人に、最後に何か、言いたかつたけれど、何を言っているのか、わからなかつた。食べ終わってただ、胸をいっばいにして、「ごちそうさまでした」と言っただけだつた。

「まだあるよね。おれの分。あとふたつかみつつ、もつとく

れよ」

女性スタッフに海人が甘えている。

「わたし、帰ります」

少女がいきなりそう言つたので、海人は心がぎれたような悲しみを覚えた。そこで初めて、この子の名前、何だっけ、と思つた。裕美子、いや、違う。それは役の名だ。ほんとの名前は何だっけ。さよなら。ああ、さよなら。少女は海人に背を向ける。遠ざかつていくその背中。心のなかでこっそり言う。おれのサイン、ほしくねえのか。

〈了〉

小池昌代 Koike Masayo

59年生。詩人・作家。女子生徒と中学校教師の詩を通しての交流と距離感を描く「わたしはまた、その場所を知らない」(「文藝」09年春号)や「裁縫師」(角川書店)など、大人にも子どもにもなり切れない人物のものとかしさを巧みに描く。その他、詩集『地上を渡る声』、同『パパ、ママ、サラバ』、短編集『タタ』など。若い読者に向けた詩のアンソロジーもある。

講談社◆話題の文芸書

# 昨日みた バスに乗って

小林紀晴

定価1,785円(税込) ISBN978-4-06-215826-8

新境地を開いた  
作品集

旅は終わった。でも、心は旅を求め続ける。  
テロ直後のニューヨークから、メキシコ、インド、  
そしてニューヨークへと続く旅。  
訪れた先で過去は姿を変えて現われる。



〒112-8001 東京都文京区音羽2-12-21

創業100周年  
講談社



放課後の図書室は薄暗い。隣に立つ学級委員の視線を追うと、本棚の奥、冬の気配に沈む窓辺にちいさな人影が見えた。お行儀悪くも張出窓に腰掛けているのは、四時限目にあった「読書の時間」の先生だ。美袋先生は私たちが近づくと、一度も顔をあげなかった。……本を読んでいたのだ。あの、これ、持ってきました。先生が仰ったんですよ、私たちの薦めの本を知りたいって。声に滲んだ呆れが判ったのだろうか、学級委員が私を見る。美袋先生はつと笑んで、静かにお礼を言った。そうしてはらはらとわら半紙をめくりながら、猫みたいに喉の奥で笑う。

先生は何を読んでいたの。

そう言った学級委員の声はほのかに震えていた。

「蕨ヶ丘物語」です。

色のあせた表紙を示して、美袋先生は私を見た。

転入してきた女の子を見て、読み返したくなりました。どきりとした。けれど美袋先生は何も言わない。

ただ図書室を出る時に、思い出したように暗がりから声が差しのべられた。

新くん、学級文庫を足しておいてください。

頷いて戸を開ける学級委員の手には、いつの間にか紙包みが抱えられていた。誰もいない教室の窓辺へ近づくと、学級委員は紙包みを解いた。新しいのと古いのが混じった本は、知らないものばかりだった。苦い呼気に振り向くと、学級委員のぎゅっと結んだ口が見えた。私の、まだ一人だけ違う制服を覗かれた気がした。

芹生じゃなくて、おれがあの人にあいう風に本を薦めて貰えたら、よかった。そうしたら、素敵だったのに。

黙っていると（吃驚したのだった）、学級委員は眉を寄せた。ごめん、気にしないで。せっかくだから、何か持って帰れば。早口と言って、学級委員は出ていってしまった。

ぼんやりと困惑したまま、学級文庫から一冊を引き抜いた時。私はふと、気づいた。転入してきたから友達みたいな口を利かれたのは初めてだったのかもしれない、と。

## nanakikae

本好きがこうして手製本やブックカバーまで自作してしまう「文学少女」。ブログ日記「日々是読書」(<http://gosui.exblog.jp/>)が人気を博し、「彷彿月刊」で連載を持ちつつ、風呂敷に教科書や本を包んで学校や図書館通い。永遠の愛読書は『崖の館』(佐々木丸美)、『自白と偏見』(オースティン)。

## 放課後 学級文庫

②花と蜜

次の日、学校へ行くと教室には誰もいなかった。からりと軽い引き戸を閉じると、古い本のような静けさが満ちる。

私は鞆を机にかけて、昨日学級文庫から引き抜いた本を取り出した。文庫本よりすこし細長いかたちをした本は、手の中でやさしく開く。私はすすんで本を読むわけではなかったから、昨日学級委員が見せた気持ちも、美袋先生がしていたようにしんと本を読むのも、ふしぎだった。歯ざわりの柔らかいものを食べた時のように。美袋先生が選り、学級委員が並べた本のひとつであるそれは、『花と蜜』という本だった。表紙には何も記されていないかったので、めくって初めてその名を知った。

チャイムが鳴る。人の気配があふれた。話し声がさざなみとなって耳に触れ、髪や肌を撫ぜる。可愛らしい童話かと思っていた『花と蜜』は、頑なな感じのする本だった。深い緑のインクで写し取られているのは虫の営みであり、見慣れぬ風景で、その中にほんの一滴分の夢が落とされている。時々、授業をする先生の声や、黒板をチョークが掠る音が身体にぶつかってくる。水面から顔を出すように本から目をあげようとするけれど、いらいら本をお読みなさいと囁かれるのに甘えてページをめくった。

……いつしか本は、終わりにさしかかっていた。私は一度本を読みさし、目を瞑る。ややあつて目を開いた時、机に伸びた本の影がふると身震いした。立てて置いた本に、ちようちよがとまっているのだった。毒々しい色をした翅が瞬いては揺れる。その度にちようちよは艶を失い、濡れた翅の色は薄らんで、触れば千切れそうに寄る辺ない翅の輪郭が硬くなる。それは、涙が枯れていく様に似て、見つめるだけで喉が渇いて痛い。あ、あ、と思ううちに翅は紙の色に染まり、ちようちよと本は一つに繋がれてしまった。

その時、がたがたと乱暴な音がした。振り向くと、引き戸の向こうから知らない先生が顔を覗かせている。

「あなた、どうしたの。今日はお休みでしょう。祝日ですよ」

早く帰るなさいねと言う声に辺りを見回すと、教室にいたのは本当に私ひとりきりだった。窓からは、昼の燦々としたひかりが明るくこぼれていた。

おそろおそろ目を落とした本には、ちようちよが時を止めて佇んでいる。およそ夢ではないはずなのに。触れると、ちようちよの翅は本物の紙のように指を押し返した。



# 旧作異聞

19



『夜明け前』  
(岩波文庫)



斎藤美奈子

Saito Miruko

56年生。94年、『雑学小説』で評論活動をはじめ、古典とベストセラー、時事問題をからマンガ・アニメまで、題材の硬軟を問わず古銭鑑く論じる著作には、読者の物の見方をひっくり返す「からウロコ」が満載。『文芸春秋』『本の棚』など。

「本會路はすべて山の中である」。たいへんに有名な島崎藤村『夜明け前』(一九三五年)の書き出しである。

岐阜県と長野県の県境に位置する本會一(一番目の宿・馬籠(岐阜県中津川市)。ここが『夜明け前』の舞台である。山の中をゆく旧中山道とは別に、現在は本會川沿いの狭い土地を奪い合うようにしてJR中央本線と国道19号線が走っている。場所は単なる背景という小説も少なくないなか、『夜明け前』は正真正銘のこ当地文学だ。

もっとも、じゃあこの本を全巻読破した人がどのくらいいるかとなると、いささか心許ない。なにしろ文庫本にして全四冊の大作だし、いま急いで読まなければならないほどの必然性は感じられないし……。

しかし、もし読むなら「いまがチャンスだ!」といっておこう。『夜明け前』は幕末維新、それも地方から見た御一新(明治維新のこと)を描いているからだ。政権交代、国家と個人、地方と中央、官と民。「変革の時代」を考えるにはピッタリな素材なわけ。

物語は馬籠宿の本陣問屋庄屋を兼ねた家の当主 青山半蔵(藤村の父・島崎正樹がモデルといわれる)を主人公に、黒船が来航した一八五三(嘉永六)年から、日本が近代国家としての体裁を整えはじめた一八八六(明治一九)年までを、中央の動きをからめながら追う。ごく単純化すれば、『夜明け前』は御一新への期待を裏切られ、絶望の中で死んでいった一地方知識人の悲劇的な生涯を描いた小説、ということになるろう。

問題はしかし、彼が何に期待し、何に絶望したのかだ。

新政府に対する半蔵の絶望は二つあった。

ひとつは王政復古の夢が破れたこと。平田篤胤や本居宣長に心酔する青山半蔵は、わかりやすくいうと思想的には右翼に近い。維新で彼はいわば日本が古代のような「天皇を中心とした神の国」になると思ったのだ。しかし、明治政府は西欧列強を手本にした近代化への道を選んだ。失望した半蔵は、明治天皇の行列に和歌一首をしたためた扇子を投げる

という突飛な行動に出て、逮捕されてしまう。

もうひとつは、維新による「夜明け」が本會谷には訪れなかったことである。徳川時代の本會の宿場は、参勤交代を中心とした接客業で生計を立ててきた。維新で経済が立ちゆかなくなった本會の村々は、林業に望みを託し、山林への入山権を求めて嘆願書を出す。が、県は村民の自由な森林伐採を許さなかった。民衆の先頭に立って奔走した半蔵は、乱の首謀者として戸長(旧庄屋)の職を解かれてしまう。

思想的に右翼っぽい半蔵が、左翼的ともいえる住民運動の先頭に立つ。そこがこの小説のおもしろいところなんだけど、要するに半蔵は四十代にして、右と左、両方からの挫折を味わうのだな。

以後の半蔵は腑抜けも同然の状態になり、晩年には寺に火を放つなどの奇行ゆえに座敷牢に閉じ込められる。「お前たちは、俺を狂人(まが)と思ってくれるか」「わたしは、おてんとくさまも見ずに死ぬ」などの言葉を残して五六年の生涯を閉じた半蔵。藤村は「慨世愛国の士をもつて発狂の人となす、豈に悲しからずや」という父の言葉を自著で引用しているそうだ(猪野謙二による岩波文庫版の解説)。

五平餅や栗きんとんアイスと同列の馬籠宿の観光資源として消費するにはあまりに重い。〈本會路はすべて山の中である〉より〈おてんとくさまも見ずに死ぬ〉のほうが重要でしよう、作品的には。

なんだけど、晩年の青山半蔵の「発狂」については再検証が必要だろう。不眠、幻聴、幻覚、妄想、そして徘徊。小説の中ではとりわけ座敷牢の中の半蔵が〈自分の尿を掴んでいて、それを格子の内から投げつけてよこした〉ことが衝撃的に語られているのだが、これはそう、アルツハイマー型認知症(年齢からいけば若年性の)の症状に近いのだ。もしそうなら、御一新への絶望と晩年の「発狂」の間に因果関係を求めるのは無理がある。というか、認知症の人を座敷牢に閉じ込めた時代こそ「夜明け前」。本會路の話は本會路の中では完結しないのであった。 ㊦

Wasedabungaku

ナボコフが、トルストイが、クローンに?

究極の前衛 翻訳開始

3

予価 1500円

「青脂」ソローキン  
300枚 訳 望月哲男  
松下隆志

クロード・シモン  
100枚 訳 芳川泰久

「農耕詩」  
100枚 訳 芳川泰久

「コドモとブンガク」  
「ダブル対談」  
西原理恵子  
金原瑞人

重松清  
「論考」  
斎藤環 斎藤美奈子  
千野帽子 宇野常寛

新人賞受賞作発表  
前代未聞の延長戦  
選ばれた作品は「選考委員」  
東浩紀

川上未映子 中村文則  
小野正嗣 伊藤比呂美 墨谷渉  
木下古栗 伊藤比呂美 仙田学  
村田沙耶香 古川日出男

大杉重男 石川義正 武田将明  
伊藤剛 神山修一 江南亜美子  
中沢忠之 久保昭博 ほか

「カバリーフォト」篠山紀信

2020年1月末  
同時発売「早稲田文  
学増刊号U30」  
詳細はウェブで!

2020年1月末  
同時発売「早稲田文  
学増刊号U30」  
詳細はウェブで!

2020年1月末  
同時発売「早稲田文  
学増刊号U30」  
詳細はウェブで!

2020年1月末  
同時発売「早稲田文  
学増刊号U30」  
詳細はウェブで!



フリーペーパーなんだから、  
街へ出てゲットしろ、  
もしくは郵送で送ってもらえ、  
俺の文章はデータじゃねえよ。  
(※編集部注…モブ・ノリオ氏の「ヨミ」より引用)  
…という著者の意向により、「絶対兵役拒否宣言」は紙版でのみ掲載しております。

Waseda Bungaku Free Paper

# WB vol.18

2009年11月30日発行(年4回刊)

Published by 大日方純夫

Edited by 芳川泰久 (Editor in Chief)

近藤景亮 青山南  
西條弓子 貝澤哉  
横山絢音 十重田裕一  
立花聡子 三田誠広  
福井咲貴 山本浩司  
國重佳奈

窪木竜也 朴文順  
市川真人  
(Concept & Direction)

Design 奥定泰之 momoko

Illustration 玉川重機 p01

Special thanks to 青木誠也 都丸尚史  
山崎貴之 和野潤

編集・発行 早稲田文学会／早稲田文学編集室  
169-0051 東京都新宿区西早稲田 1-9-12  
小池第一ビル 203

TEL/FAX 03-3200-7960  
Mail wbinfo@bungaku.net  
http://www.bungaku.net/wasebun/

印刷 凸版印刷株式会社  
112-8531 東京都文京区水道 1-3-3  
TEL 03-5840-4845 FAX 03-5840-1676  
http://www.toppan.co.jp/

▼すっかり秋めいて、どこか暑込むことなしに過ごせぬ寒さで時の早さを感じつつ、秋号をお届けします。▼金原氏のデビューから6年、野崎氏『赤ちゃん教育』から4年、子育て対談に臨んでいると月日の経過が身にします。▼ぼくが編集室に拾われてからもう2年。そこで暖めてきた若手中心の増刊号が、もうすぐ発売。◎▼表紙をお願いしたのは「モーニング・ツー」掲載「草子ブックガイド」の玉川重機さん。古書店からこっそり本を「借り」、感想メモを挟んで返す同作の主人公(＝表紙の娘)は、WBにもびったりでした。本編の二話目も執筆中とのこと、待ち遠しいです。(ic)

Web上で閲覧できる電子ブック



読める！  
めくれる！  
検索できる！

早稲田文学 ばらっと 検索

WBのバックナンバーは「ばらっと」で検索・閲覧！

TRM 東京レコードマネジメント(株)  
http://www.tgn.or.jp/trm/

これから、俺たち、  
どうすりゃいいんだ。  
そうだ、ベルクへ行こう

コーヒー ¥210 生ビール ¥315

Beer & Cafe  
**BERG**

☎03-3226-1288

http://www.berg.jp

↑ベルク通信、全バックナンバー  
がご覧になれます。

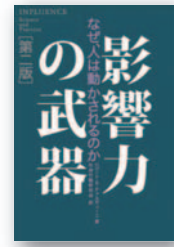
JR 新宿駅東口改札出てすぐ  
(ルミネエストB1)



# POP<sup>2</sup> リノベーション



「服従の心理」  
著・スタンレー・ミルグラム  
訳・山形浩生



「影響力の武器」[第二版]  
なぜ、人は動かされるのか  
著・ロバート・B. チャルディーニ  
訳・社会行動研究会

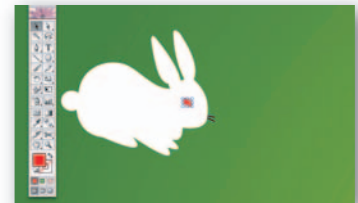
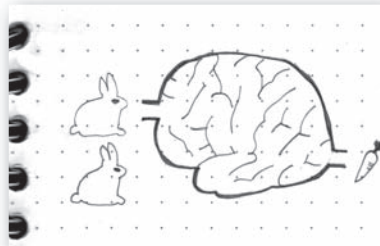
この数年、販促ツールとして注目を集める手書きPOP。店頭で読んで「これ書いたひと、わかってる！」とニヤリとしたひとにとっては、自分と書店を繋ぐツールとも言えます。だったらぼくも！ やってみたい！ そんなわけで、本誌デザイナーとともに、書店を訪ねてみました。第二回は、オリオン書房ノルテ店・白川浩介さんと、若きデザイナー momoko さんです。



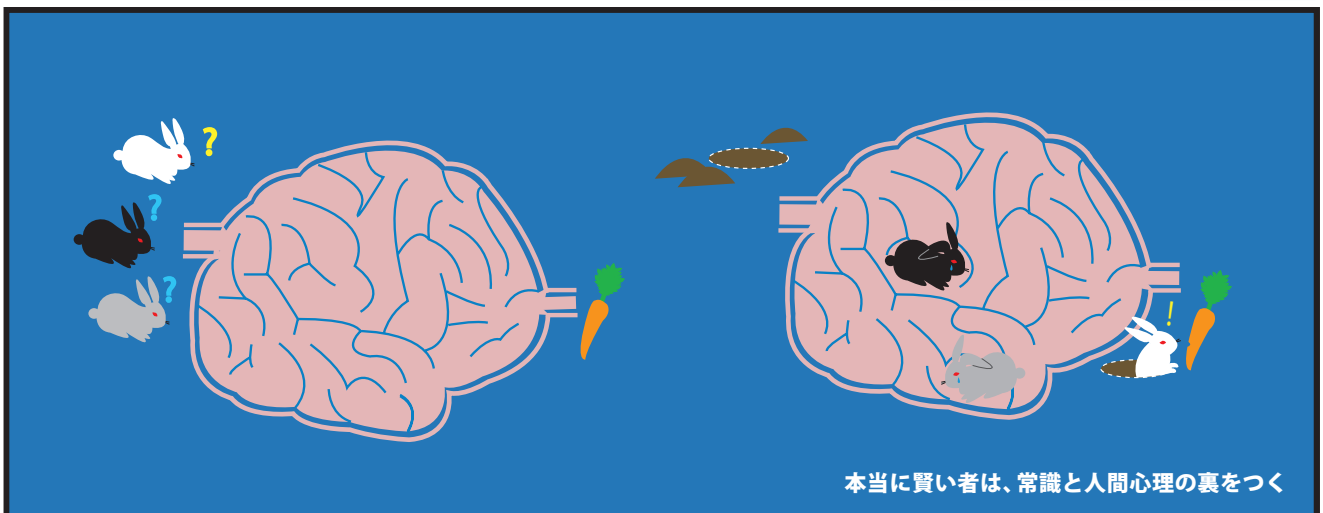
白川さんが選んだのは、上の2冊。「両方とも、ある状況に置かれた人間が、本来望んでいない行動すらも選択してしまう、という人間心理を考察したものです。POP という販促ツールを考えるにはちょうどいいかなと」。

この日の打ち合わせは、内容が一目でわかるデザインにすると決まったところで終了。momokoさん、がんばれ！

そして数日後、ラフが届きました（右図）。脳を模した迷路の先にあるニンジンをめざして、ウサギたちが悩んでいます。いったいどのルートを通ると早いのでしょうか？



出来上がったのが、下の図。2匹のウサギが「当然の選択」をするなか、1匹だけが裏道を通りました。「言葉であおるのとは違うやりかたで、見たひとを、本の内容に導入したかった」と momoko さん。ここではお見せできませんが、完成品にはさらなる仕掛けがあります。ぜひオリオン書房ノルテ店に足を運んでみてください！



本当に賢い者は、常識と人間心理の裏をつく



# Final Dragon Library World 2

ファイナルドラゴンライブラリー

## 🛡️ ぼくは勇者に向いてない『悪童日記』編

ぼくは暗い空間にいる。

謎の少女に手をつかまれて、突然あらわれた穴に引っぱり込まれた。現実感のない空間で、ぼくはただ呆然としている。

なぜか全裸だ。服が消えている。

ぼんっ！ おもちゃのように世界が生まれた。と思った。ただセカイが一瞬光っただけだった。

「助かりたいのなら、これを読みなさい」

声がする。ふりかえる。透明な少女だ。彼女も全裸だ。この暗闇の中では光っているようにすら見える。

何が起こったのか。どうなっているのか。混乱と興奮の呪縛から逃れて、正気にもどったときには、少女は消えている。

そして、ぼくの手には本とカードが残されている。

アゴタ・クリストフ『悪童日記』（ハヤカワ epi 文庫）

読むしかないのだろう。本を開いてみた。短い章に区切られた断片。断片が積み重なるようにして生み出される物語。

ぼくらは〈大きな町〉からやって来た。

主人公は、双子の兄弟。ぼくらは、お互いに殴り合う。最初は平手打ち、次には拳骨パンチ。体を鍛える訓練だ。

ベルトで打ち合う。ナイフを突き立てる。痛みを感じないための訓練だ。互いに悪口を言い合う。精神を鍛える訓練だ。

乞食の練習をする。断食の練習をする。盲と聾の練習をする。残酷なことの練習をする。騙す。万引きをする。恐喝をする。人を殺す。

ぼくらは、正しくはない。だけど、ぼくは、ぼくらの行動を、だからといって、ダメだとは思えない。

基本的に「ぼくら」はいつも一緒にいて、「ぼくは」ではなくて「ぼくらは」で語られる。だから「ぼくら」は、読んでるぼくにとって、それぞれの個性を持つ別々の二人に思えない。

けれども、かといって二人がそっくりな同じ存在とも思えない。なにやら、一人なのに二人であるような奇妙な感じが読む気持ちをざわざわさせる。

そうだ。読んでいる間、ずっとざわざわしていた。この不可思議な状況で読んでいうわけじゃない。読んでる途中で、ぼくはそんなことを忘れていた。ここに描かれる双子の冒険に夢になっていた。

ざわざわとさせられるのは、何故だろうか。

文章だ。ここに書かれている文章には、ひとつのルールがある。内容は真実でなければならない。というルールだ。

## 米光一成 Yonemitsu Kazunari

64年生。名作落ちゲー「ぶよぶよ」はじめ多数のゲームをつくるほか、小説をゲーム化しようとする『日本文学ふいんき語り』や、『仕事を100倍楽しくするプロジェクト攻略本』等、ゲームという視点から幅広い活動を見せる。  
<http://blog.lv99.com/>

## ナカシマカズユキ Nakashima Kazuyuki

67年生。作品によりまったく異なるテイストに描き分けるイラストレーター。以下のURLにはムチムチプリプリしたキャラクターたちが勢ぞろい。  
<http://www.nk-w.jp/>

ルだ。“ぼくらが記述するのは、あるがままの事物、ぼくらが見たこと、ぼくらが聞いたこと、ぼくらが実行したこと、でなければならない”というルールだ。

だから「おばあちゃんは魔女に似ている」と書くことは禁じられており、「人びとはおばあちゃんを〈魔女〉と呼ぶ」と書くことになる。「彼は親切だ」も許されない。実は親切じゃないかもしれないからだ。「彼はぼくらに毛布をくれる」というように実際にあったことを書く。「クルミの実が好きだ」もダメ。好きという語は精確さと客観性に欠けているからだ。

だから、ここに描かれているのは事実の断片だ。その並びから、ぼくが、勝手にざわざわしてしまう。勝手にあれこれ感じてしまう。勝手に、涙を流しているのだ。

読み終えて、読んでいた世界から抜け出すと、ぼくの手には本はない。本は、形を変えて、ぼくの鎧になっている。

鎧？

ぼくの周囲を囲っていた黒い壁がパターンと四方に倒れ、色鮮やかな世界が現れる。

闘技場だ。

鎧を着たぼくは、自分の上に覆い被さる影に気づく。首をひねって後ろを見ると、牛の頭を持つ巨人が立っている。巨大な棍棒を持って立っている。

気を失いそうになった。牛男は、ぼくめがけて棍棒を振り下ろした！



To be continued.



# げきからぶんがくにゅうもん

## 第02回 『まずいスープ』の幸輔

望月 旬々もん  
Mochizuki Shunjun

68年生。主として国内外の小説・演劇について「朝日新聞」「ボンズン」等で望月旬々義の書評を手がける。著書に『日本文学にみる純愛百選 zero degree of 110 love sentences』（共著）。超がつくほどの辛い物好きで、職場にはカレー部があるとのウワサも。

きみにとって、子役といえば誰？  
まあ最近だとやはり、自動車メーカーのCMでおなじみの「こども店長」っていう声が多いのかな。

NHKの大河ドラマ『天地人』でブレイクし『かつおぶしだよ人生は』で歌手デビューも果たした彼は、カレーライスの「中辛」が大好物らしい。

『こども役者 加藤清史郎のきもち』という写真＆作文集に書いてあったんだけど、それを知って思わず、つぶやいてしまったよ——「おまえ、もう『中辛』なのか!？」って。

だって、二〇〇一年生まれの小学二年生ですよ（そもそもその年でなんで店長になれるのって話もあるけど）。

じつは、ばくも劇団ひまわりの子役出身で、小学五年生のときNHKの教育テレビにレギュラー出演したこともある。でも八歳のころは……まだまだ甘口だったはず。

ばくの激辛好きのルーツは、NHK放送センターの近くにあった「ボルツ」のカレー。「インド人もびっくり」な辛さで有名だったけど、げきからぶんがくにゅうもんを読んで、「天地人もびっくり」してくれたらいいのになあ。

というわけで、今回の本は、<sup>いぬい あきと</sup> 戌井昭人さんによる『まずいスープ』。表題作のほか二作品（「どんぶり」<sup>フナ</sup>「鮎のためいき」）を収録する、いい意味でデタラメな短篇小説集だ。

どれも食べ物にまつわる馬鹿話だけど、「まずいスープ」にだけはナイスな子役キャラが登場する。

名前は幸輔、小学四年生。大学を中退したばかりの主人公（おれ）がバイトしてる、浅草にある団子屋の一人息子だ。母子家庭ながらもたくましく育ち、空手教室に通っている。母親に生意気な口もきくけど、お好み焼きを焼く天才……。

お行儀はよろしくないものの、「こんな風にお好み焼きを焼ける幸輔は多分辛抱強い奴なんだな」とする主人公の観察が正しいのならば、そんな小四男子の〈<sup>かわい</sup>可愛くない〉言動もせつない「演技」に思えてくる。

舞台は、東京の台東区にある浅草〜上野。

タイトルにもなっている件、どんだけなのか説明しておく、まるで〈魚の収まっている発泡スチロールの中で溶けている氷を煮込んだような暴力的なまずさ〉とのこと。

主人公の父親は、かくも恐ろしい「魚のアラ煮」を家族にふるまったその日、サウナへ行くと言ったきり、行方不明になってしまい……。意外と短い期間（いわゆる年末年始）の話なのに、次々と意表を突いたエピソードが語られてゆく。

と・に・か・く、父親のデタラメさが半端ねえのですが、こたつで酒におぼれるあまり「血の池地獄」を味わう母親もすごいし、何かにつけアイスを食べたがる女子高生の<sup>いとこ</sup>従妹もすばらしい。フリーターの主人公も、父親に「隠し子」（腹違いの妹でアメリカ人!）がいたと知っても怒らないし。

笑ってる場合じゃないのにあっけらかんと笑ってられる、この「家族」の得体の知れなさ。そこには、自由がある。

「駒形どぜう」（どじょう料理の老舗）のかわりに入った油まみれの〈禁断〉の中華屋で、「まずい方が美味いよりもインパクトがあるよね」とか「まずいものって、実は世の中にそうそうないんだね」とか、主人公たちが店主にも聞こえてしまう声の大きさで会話するシーンなんか、最高に面白い。

大麻取締法にふれる事柄や、ちょいエロな台詞も含まれているけど、（小学生からでも）落語みたいに楽しめる。

そそっかしくておっちょこちょいな登場人物たちも、自分たちの人生を受け入れ、楽しんでるふしがある。

〈家はモラルも常識もないのだけれど、家族の体裁は<sup>ていさい</sup>不思議と保っていた。それは物凄く危うかったけれど、無理して保っている感じではなくて、骨組みがゆらゆらなビルのように

はあったが、意外にバランスがよくて、崩れ落ちたりはしなかった〉という人間関係ゆえに。

ゆる〜い感じが、うらやましい! 「味覚」もゆさぶられる、ゆるキャラならぬ、ゆるファミ小説の傑作だ。

ちなみにばくは、読んでるうちに、タコを使ったカレー鍋（和風かつおだし）を作りたい気持ちになりました。

というか、幸輔くんにも、食べさせてあげたいな。♫

## 「日本文学」の成立

鈴木貞美

日本「文学」の特性と  
その成立の由来を  
明らかにする記念碑的労作!

詩歌・戯曲・小説に留まらず神話・伝説から哲学・宗教まで……  
日本における「文学」概念は何故かくも広義の範疇を含むか?  
欧米の「人文学」、中国の「文章学」も異なるその特性の形成を  
歴史的・概念的に捉え直しつつ解明する。 ●3570円

作品社 東京都千代田区飯田橋2-7-4/ 価税込  
TEL03(3262)9753 FAX03(3262)9757



金原瑞人選

オールタイム・ベストYA第1弾!

The Shrouding Woman

とむらう女

ロレッタ・エルスワース 代田亜香子 [訳] 11月下旬刊行予定 ●1680円  
ママを亡くしたあたしたち家族の世話をしにやってきたフローおばさんは、死んだ人を清めて埋葬の準備をする「おとむらい師」だった……。  
19世紀半ばの大草原地方を舞台に、母の死の悲しみを乗り越え、死者をおくる仕事の大切な意味を見いだしていく少女の姿をこまやかに描く感動の物語。



# 未来の読書とランデブー

新城カズマ

Sinjaw Kazuma

生年不詳。無類のSF好き高校生の青春小説『サマー／タイム／トラベラー』はじめ多くの著作をもち、『ライトノベル』『超』『入門』『物語工学論』等の評論も手がける。ブログ「散歩男爵」「twitter (id: SinjawKazuma)」も鋭意更新中。今秋より新作長篇『15×24』を連続リリース。

第02回 ● 未来の書籍がやって来た

ONE-PP02

——某月某日、都内の某ファミレスにて:

新城「(ケータイにむかって) や、ごぶさたです。ええ、あつというまに3ヶ月も経っちゃって。……そうなんですよ、このエッセイでは書物や図書館の未来を考えていこうと思っていたら、次から次へと新しい動きがあって、追いかけるだけで大変です。例のグーグル・ブック検索問題も、アメリカの法廷で採めまわったりヨーロッパや中国で反対の動きが本格化したり……アマゾンの電子書籍購読マシン『キンドル』も話題になってますし……グーグルも負けじと安価で高速なオンデマンド製本機『エスプレッソ』を開発した会社と提携して、著作権切れの作品をその場で書籍にします、と言いつつ……あ、それにセカイカメラも始まりましたね。そうです、iPhoneで見ることでできる仮想のメモ(『エアタグ』というんですけど)を、自分の好みの場所にべたべた貼り付けていく、という例のあれです。他にも、3次元プリンタ技術が気になって調べてるんですが……ツイッターも注目を浴びたり、ボーカロイドも日々進歩したり、お台場にガンダムが立ったり、立体テレビがもうじき実用化されそうだったり、政権交代が起きちゃったり。なんだかもう、未来のほうが一斉に僕らの現実へ押し寄せて来ちゃった、みたいな」

B「あら、よく気がついたわね」

新「わあ何だ何だ、どうも窮屈だと思ったら、いつのまに隣の席に。それにしても君は……ていうか、君たちは誰？」

B「(3冊そろって) 私たちは未来の書籍、名付けてeシスターズよ。見ればわかるでしょ」

新「なかなか無茶を言うキャラだな、今回は。連載第2回にしてこれとは、先が思いやられる。まあいいや。今ちょっと忙しいんだ、エッセイで採り上げたい出来事がたくさんありすぎて、どれについて語ろうか慎重に考えないと」

B「(5冊同時に) なにを言ってるの。あんたがさっき口にしてた話題って、ようするに一つだけじゃないの、ないの、ないの!」

新「(エコーに目をひそめつつ) そんなことないだろ。グーグル裁判とキンドルとエスプレッソは関連あるけど、ツイッターとセカイカメラと3次元プリンタとお台場ガンダムと立体テレビと政権交代は全然別の」

B「(9冊が一斉に) あーあ、わかってないのねえ。ま、だからこそ私たちがわざわざ来てあげただけだよ。感謝しなさいよいよいよよよよよ」

新「……どうでもいいけど、どうして君たち、さっきから人数がどんどん増えてるの？」

B「(24冊が順番に) まだ解らないの? 私たちはeシスターズ——オンデマンド製本機エスプレッソで次々と生み出される、この世に一冊だけの書籍の集まりなのよ。あんたの時代には、あの機械はまだ10万ドルもしたけれど、日本のメーカーがいろいろ努力したおかげで、999ドルにまで値下がりしたの」

新「え、ということは……印刷と製本を全自動でやってくれる機械が、一台たったの9万円!？」

B「(70冊全員で) 円高が進んだから、もうちょっと安いけどね!!!!!!」

新「(大音響に耳をふさぎつつ) よけいに凄いい! パソコン並みの安さじゃないか!」

B「(200冊が輪唱で) ま、高級品は未来でも90万円台よよよよよ。でもでもでも、重要なのはそこじゃないの。あんたが気にしてる3次元プリンタをはじめ、立体テレビも、セカイカメラも、ツイッターも、すべて本質はオンデマンド製本機と同じ。情報をくりかえし好きなだけコピーできるだけでなく、くりかえし好きなだけ実体化させて印刷物や立体物にしたり、また情報に戻したり、文字を音楽にしたり、音楽を映像にしたり、それを地球の裏側へ送信して、そこでまた印刷物に戻したりできるのるるる! これぞ未来の書籍……いいえ、未来のショセキ! 私私私私私はもはや単なる物体でもなければ情報でもない! 物体と情報のあいだを何度でも自由に行き来できる状態のものなのっっ!」

ウェイトレス「(大音響の中、次々とレジへむかって逃げ出してゆく他の客たちを、不安げに横目で確認しつつ) あー、お連れの方がまだ増えるようでしたら、追加の椅子お持ちしますけど」

新「あ、ご心配なく。もうじき終わりますから。——なるほど、ようやく解ってきたぞ。これまで書籍といえば、情報が一回っさり物体になる、つまり印刷しちゃったらそれきり変更できなかった。一方ネットの情報は変更自由だったけど、手軽に物体化できなかった。未来では、この二つの世界の便利な性質が一つになるわけだ。専門用語で表現するならば、有体物と無体物の安価な相互反復変換が技術的に可能になった、あとは法律の整備さえ済めば……あ、だから政権交代も書籍の未来に関係してくるのか」

B「(9万9999冊になって) 難しい言い回しはNGよ! このエッセイは若い子も読んでるんだから!」

新「いやいや、子供を子供扱いしちゃダメだよ。今はいくらだって調べる方法はあるんだ。それこそ図書館やネットでね。さて、というわけで今回おすすめの本は、これにしよう:

『伝奇集』

ホルヘ・ルイス・ボルヘス (岩波書店)



この中に収められている短篇『トレーン、ウクパール、オルビス・テルティウス』は、まさにそういう話なんだ。情報がどんどん増えながら現実世界と区別がなくなり、そしてついには——」

(その時とうとう100万冊を超えた未来の書籍によってファミレス店内は満杯になり、窓ガラスが割れて新城カズマとウェイトレスと無数のeシスターズは凄まじい勢いで大通りへと溢れ出し、しかしそれでも書籍の増殖は止まらず、このフリーペーパー『WB』全面を覆ってしまい、そしてついには——) 〆

## 本年度(第37回) 泉鏡花文学賞受賞!

ほぼ全員一致で決まった。泉鏡花を思わせる幻想美の世界が随所にある。ものすごい力を持つている。驚きを持って読んだ。新しい観念小説だ。

嵐山光三郎氏

選考委員を唸らせた  
圧倒的筆力で注目の新鋭!

# 魚

い  
お  
が  
み

# 神

千早茜

好評発売中 ● 定価 1,470円(税込)

光と影のように結ばれた、美しき姉弟の運命は?

遊女屋が軒を連ね、巨大な雷魚の伝説が眠る孤島に生きる捨て子の姉弟、白亜とスケキヨ。惹きあい、そして避けあふふたりが、再び寄り添う時……。第21回小説すばる新人賞受賞作。



〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2-5-10

集英社



# 今月のウチのオススメ

## 『蜘蛛の糸』

芥川龍之介

お釈迦様ってヒドイ。

## 『蕭々館日録』

久世光彦

きっと、芥川に恋をする。

## 『こおろぎ嬢』

尾崎翠(『ちくま日本文学 4 尾崎翠』収録)

「パンよりも、霞を食べて暮らしたい」。

## 『もの食う人びと』

辺見庸

食べることは業である。

### あなたの「オススメ」をつくりませんか？

#### ①オリジナル WB をつくって配布！

→上記「今月のウチのオススメ」には、早稲田文学のオススメを仮に掲載していますが、早稲田文学編集室サイトからダウンロードした専用シート(PDFおよびWordデータ)をプリントアウト→記入・入力→切り取り→貼り付けて、みなさんの「オススメ」を作っていただけるようになっています。

「WB」を設置してくださっている図書館・書店・カフェ等のみなさん、お友達に手渡してくれている読者の方々、オリジナルの「WB」を作ってみませんか？もちろん、これから配布を始めていただける方々も、大歓迎です。

#### ②本を紹介してくれる司書さん・図書館員さん、大募集！

→左ページの「教えて！ 図書館だより」欄で書籍を紹介して下さる、図書館関係者の方を募集しています。ご応募いただいたなかから毎月1名の方の「オススメ」を、カラーで紹介させていただきます。紹介したい本を5冊と、それぞれに10～20字程度のコメントをお寄せください(紹介させていただく方には別途、1000字程度の紹介文をお願いする場合があります)。

ご応募いただける方は、氏名・住所・電話番号・メールアドレス・所属施設名を添えて、p.7 記載の送付先まで、メール・郵便・FAX 等でお送りください。

#### 扶桑社の文芸単行本

### 文学の器

現代作家と語る昭和文学の光芒

坂本忠雄 著 ■定価3,150円(税込)

必読! 昭和文学最強入門書

### 風景十二

坪内祐三 著 ■定価1,890円(税込)

駅前、図書館、喫茶店 etc.  
12のキーワードを元に、  
まちを歩き、しんを歩行する  
——記憶が湧きあがる、名随筆

### 暮らしの手帖

ECD 著 ■定価1,575円(税込)

愛はいかにして続くのか…  
伝説のラッパー、初の短編小説集

### 倶楽部亀坪

亀和田武×坪内祐三 著

■定価1,890円(税込)  
昭和の香りを追いつながら  
街と歴史を語らう「散歩文学」の粋

#### 超世代文芸クオリティマガジン

## en-taxi

ODAIBA MOOK No.27 AUTUMN 2009

エンタクシー 27号

A4変型判 定価980円(税込)

責任編集

坪内祐三

福田和也

リリー・フランキー

好評  
発売中

### 特集 東京ノイフェイス

09年「第5次変化期」の  
深層、通景、文脈

酒井順子/枝川公/大倉舜二/泉麻人  
中野翠/陣内秀信/藤森照信 他

### ブルジョワジーの 秘かな愉しみ

小金持ちが近代文学を作った  
福田和也/池内紀/前田司郎 他

好きな東京、気になる東京写真展  
長野重一/ホンマタカシ/高梨豊  
鬼海弘雄/佐藤信太郎/中野正貴  
田中長徳/佐内正史/梅佳代

### 立川談志「小さんを語る」

「連載小説 第五章」  
「願わくは、鳩のごとくに  
六十過ぎの子育て記」 杉田成道

「小説」140枚  
「a good loser」 臼井風人

「新連載小説」その一  
「その役、あて書き」 大鶴義丹

佐伯一麦/田母神俊雄/津村記久子  
目黒孝二/春日武彦/南博/草森紳一 他



# 教えて!図書館だよ

日本はもちろん世界各地の図書館ではたらく人たちがイチオシの本を紹介!



## 『あたしをさがして』

岩瀬成子

逃亡、もしくは追跡



## 『グリーン・レクイエム／緑幻想』

新井素子

あたしの正体、あたしの愛



## 『スリースターズ』

梨屋アリエ

ガールズ・テロリスト



## 『一人の哀しみは世界の終わりに匹敵する』

鹿島田真希

学園を異世界にする



## 『金原瑞人YAセレクション みじかい眠りにつく前に』

金原瑞人編

YA の魅力をぎゅっと凝縮

新宿区立大久保図書館・司書

安竹希光恵さん

私の勤める新宿区立大久保図書館は、コリアンショップが軒を連ねる大久保通り沿いに位置しています。英語、韓国語、中国語資料も所蔵して、年に一度、子ども向けに韓国語によるお話を開催するなど、ささやかながら多文化サービスを行っているのが特色です。

さて今日は、私のだいすきな小説から、「まだ大人でなければ、もう子どもでもない」ヤングアダルト読者におすすめしたい5冊を紹介したいと思います。

まずは、児童文学作家として、子どもや若者の心の機微を描きつづける岩瀬成子『あたしをさがして』。主人公「あたし」の意識を細やかに綴る文章が魅力です。むしろ「あたし」に集中しすぎて、話がとどろんとずれていってしまうほど。物語として何が起きているのかよくわからない、悪い夢がずっと覚めないでいるかのようです。けれど、「自分の見ている世界が、どれほどの客観性をもっているだろう?」と不安になったときに読めば、深く響くものがあります。現在絶版ですが、この本に限らず絶版本こそ、図書館にあってほしい。その図書館では未所蔵であっても、他館と連携して取寄せが可能な場合もあります。

同じく「あたし」の意識が強力に作品にはりついて見える、でも、まったく対照的な作品として、SF作家・新井素子『グリーン・レクイエム』があります。2007年にはなんと3冊も復刊、手に入れやすくなりました。短篇集『窓のあちら側』(出版芸術社)、イナアキコの挿絵つき児童書版

『グリーン・レクイエム』(日本標準)、続篇「緑幻想」収録の文庫版『グリーン・レクイエム／緑幻想』(東京創元社)。主人公・嶋村信彦は、子どもの頃に緑色の髪をした女の子に出会った記憶のある、植物学を研究する青年ですが、ある日、記憶の中の女の子と瓜二つ娘に恋をします。もどかしく運命的な初恋、グリーン・レクイエムの曲にこめられた愛の意味、そして「緑幻想」にいたっては、壮大な愛が語られることになります。

『スリースターズ』は、ヤングアダルト作家として第一線で活躍中の梨屋アリエによる、危険でせつない作品。まったく環境の異なる3人のティーンの子供たちが、携帯サイトを通じて出会い、テロをたくらむ。鬱屈した日常、友達関係、自分の中の悪意——。少女たちの、自分が救いを求めていることすら気づきたくないという高慢さや繊細さを鋭く描く傑作です。結末に至って、その鋭さは、優しさなんだったことがわかります。

「女の子の日常を描いた作品を読みたいけれど、なんだか飽きちゃった」と贅沢な悩みをもつことがあるのですが、そんなときには鹿島田真希『一人の哀しみは世界の終わりに匹敵する』を。パレンティン、クラス替え、女子高生の妊娠というモチーフは、いかにも「青春もの」ではありますが、その描き方がもう聖書みたいなのです。特に「天・地・チョコレート」は、とんでもなくカッコいいし、「少女の日常」が違って見えてきます。

最後は、ピュアフル文庫より『金原瑞人 YA セレクション みじかい眠りにつく前に』全3巻。



各巻に10作品を収録。執筆するには、児童文学やヤングアダルトというジャンルで活躍し、ジャンルが持つテーマや手法を極め深めるように活動する作家もいれば、大人の小説をメインに書いている作家もいます。このセレクトには、長年ヤングアダルト作品を紹介してきた金原瑞人の立ち位置がよく表れています。ヤングアダルトというジャンルの独自性を認めつつもそこに縛られるのをよしとしない、かといって、このジャンルを一般書よりも低く見つもらない、ということ。

大人や子どもの定義を根本から考えはじめると、雲を掴むように見えなくなってしまうヤングアダルト。児童書と一般書が混在するなかでの棚作りは、図書館員にとって頭の悩ませどころでもあります。やりあっていく一つの指標にもなるのです。



んじゃう子どもが出てきますよね。その子が、お父さんのことをとても大事に思っていて、いつも手をつないで散歩している。自分に子どもができたせいか、その辺の描写がどうしても目に飛び込んできてしまう。

**金原** ある視点ができてって感じですね。私も妊娠しているときには、街に妊婦さんがどっと増えたように、たくさん目に入ってくるんです。出産したらしたで、同じくらいの子どもの連れているひとがたくさん視界に入る。

**野崎** それを聞いて安心しました（笑）。ぼくは子どもができる前は猫がすごい好きだったんで、そのときは映画も小説もまず猫から見ちゃって。

**金原** それなのに「いまは猫はかなりどうでもよくなった」ってひどい話が『赤ちゃん教育』の中にも（笑）。

**野崎** いやー、最近は子どもがかわいがってくれるようになりました（笑）。自分の立場で見え方が変わってくるのは、もう仕方がないし、むしろそれによっていままでと違う視点が楽しめるのがいいかなあ、と思うんですよ。スタンダールの『赤と黒』を翻訳していたときに、こういうことがあったんです。主人公のジュリヤン・ソレルは最初に人妻と関係して、それがまずくなるとバリに移るような奴なんですけれど、今度は貴族の娘と関係する。すぐに子どもができるんですね。するといきなり父親の自覚をもって、「息子が産まれたら結婚しましょう」なんていう。でもなぜ息子とわかるのか。

**金原** まだ妊娠したばかりなのに。

**野崎** そう思いこんでいるんですよ、周りの人間もみんな。

**金原** 誰も「女かもしれない」といわないんですって？

**野崎** そうなんです。自分に子どもができたからといって、その謎がとけたわけじゃないんですが、でもいままで考えてもいなかったことが引っかかってくるようになる。あと、ぼくは幼いころそれほど熱心に絵本を読んだ記憶がなくて、やはり子どもができてから絵本の世界を体験したんです。金原さんは、もちろんお父さん（金原瑞人氏）がいらっしゃるし、絵本や児童文学には親しんできたでしょう。

**金原** 私はでも、絵本や児童文学はほとんど読まなかったですね。家にはありましたが、ふつうにあるものとして見ていただけて、「読むものだ」って意識があまりなかった。そういう土台がないところから、純文学に入っていったので。

**野崎** 娘さんはどうですか、絵本は？

**金原** 大好きです。ひとに読ませるのも好きだし、ひとりで音読しているのも好き。

**野崎** どんな本を読みますか？

**金原** ベタです。『ぐりとぐら』とか『はらぺこあおむし』とか。基本的には王道なところばかりです。絵本にはやりすたりがないですよ。重版が多ければ多いほど子どもはきちんとハマるので、そこを重点的に見ます。



**野崎** 最初にしゃべった言葉ってなんでした？

**金原** 「ワンワン」か「バイバイ」だったかな。「パパ」は割と早かったのに、「ママ」は頑なに一歳半くらいまでいいませんでした。

**野崎** 待たせたねえ（笑）。

**金原** ひとに話すと、「子どもは母親と自分の区別がついていないから、『ママ』っていわないんだよ」って気休めを（笑）。

**野崎** うちは、やっぱり「ママ」だったかなあ。

**金原** そうですか！ いいなー！

**野崎** 申し訳ありません（笑）。次が猫の名前で、三番目にぼく、序列をよく表してるなあって。うちの子が男だからのストレートさかもしれない。

**金原** はじめての二語文が、「パパ、あっち」だったんです。主人の部屋を指差しながらいうの。その次に覚えたのが「パパ、ねんね」で、次が「パパ、いない」。すべて父の不在を指している言葉で。最初は、すごい嬉しかったんですけど、だんだん不愉快になっていって。

**野崎** （笑）。でも、お父さんの存在がしっかりしていいよなあ。それ

こそフロイト的にいっても、父の不在を言葉で埋めるみたいに、立派に筋が通っているじゃないですか。



**野崎** 子どもって本当にかわいいし、いろいろ書きたいことはあるんだけど、本当の意味で「子どもを書く」のって難しいと思う。たとえば大江健三郎さんの例がありますよね、イーヨーという人物を作り上げてしまった。現実にとっても近い部分もあるだろうけれど、やっぱり大江ワールドの、想像的で創造的な部分をもつ存在だと思う。なかなかできることじゃないですね。

**金原** やっぱり実際に小説に、自分の子どもじゃなくても、リアルな子どもたちで子どもを入れていくことには抵抗感がありますよね。

**野崎** 『アッシュベイビー』を書いたひとだから、子どもは絶対書くでしょう。子どもって、金原さんの世界の中ですごく活きたと思う。

**金原** うーん、でもやっぱり大きくなったら読むかもと思うと、憂鬱です。

**野崎** やっぱり考えますか？ たしかにナーバスにならざるをえない問題だと思います。書いたものによって人間の、大げさにいえば運命とか、人生が変わるんじゃないかっていう局面も考えられるわけでもすんね。でも、筆が鈍っているふうもないわけだから。

**金原** いまのところは（笑）。

**野崎** 逆に、いずれ自分の作品以外的小説は読ませますか？

**金原** ほうっておきたいですね。勧めたくはない。

**野崎** お母さんが一生懸命ものを書いているひとだってことはすぐに理解しますよね。きっともうわかっているでしょう。「どういう本を読めばいい？」とか聞いてくるのでは？

**金原** わたし自身、父が翻訳家で、家にはいっぱい本があったんですけど、ぜんぜん手に取らないまま大きくなって。アメリカに行ったときに勧められて、日本の純文学を読みはじめたんです。そういう感じで、必要に応じて間接的に勧めていくことができたらいいなあと思います。「これを読み、あれを読み」とは言いたくないですね。生まれてすぐのころは、「裸で草原を駆け回るような子になってもらいたい」って思っていました。

**野崎** 裸形だ（笑）。

**金原** アポロンみたいな、遊ぶ神々という感じで、健やかに自然と戯れるっていう。もちろんイメージですが。できる限り教養を身につけずに育てて欲しいと思ってました。でも、いざ産まれてみると、絵本も好きだし、いろんなものを知りたがっている姿を目の当たりにして、「親のエゴだったなあ」と反省しました。

**野崎** 無理やり裸にして草原に放すわけにはいかないもんね（笑）。社会のいろんな価値の中に入っていくことになるんだから。うちの場合、遅くできた子だから特にそうなんですけれど、産まれる前はそれこそ「五体満足であれば」としか考えていなかったんです。でも産まれるとやっぱり、「もうちょっと駆けっこがなればよ」とか「参観日の授業では手を挙げろよ」とか、次から次へ出てくるのは、自分でも情けないんだけど、なかなか止められない。だから、そうやって「親をやらせる力」は本当に強いと思うんです。

**金原** やっぱり比べちゃうんですね。

**野崎** 「草原を裸で走る」って、ある種の絶対的なイメージですよ。そういう境地っていうのは本当、夢ですよ。

**金原** 実際なったら困りますけど（笑）。でもそれぐらいの気持ちで育てていきたいと思ってます。

**野崎** 今日うかがった話だと、お子さんはそれ以上に、どんどん賢くなっている気がします。文化的な度合いがぐんぐん高まっているんじゃない？

**金原** 自然にしておいたらどこまで本を読むようになるのか、どういふうに興味を持っていくのか、それを見たいですね。できる限り自然に任せて。

**野崎** 楽しみです、金原家の三代目は、果たして草原を走るのかどうか。裸かどうかはともかく、ですが（笑）。



**野崎** 実際の話、子どもが産まれて生活が変わったでしょう？

**金原** 変わりました。私は作家になってからはほとんど家事をしなくなっていたので、基本的には一日中小説のことだけを考えて生きていたんですが、子どもができたときから執筆に加えて育児と家事がいきなりプラスされたので、毎日毎日、一日がうわーっと過ぎちゃいます。

**野崎** そういう変化は、覚悟していました？

**金原** してませんでした。自分の時間は永遠に自分の物として存在し続けると信じてました。怠惰で素晴らしき日々でした。

**野崎** ぼくも甘かったと思うのは、産まれた後のことをあんまり考えていなかったんです。うちは予定日を過ぎてもなかなか産まれなくて、それがまず心配で、「まだかまだか」と思ってたものだから、出てきたらめでたし、めでたしのような気がしちゃって。実際は、そこから子育ては無限に続くんですよね。想像以上に多くの時間を取られるようになって、……でも、なんとなかなっている。時間の使い方が変わるってことなのかな。

**金原** もちろん家事や育児は多少なりとも人の手を借りているわけですが、毎日毎日忙しくて、かりかりしながら育児と家事と執筆をこなしていく中で、あるとき、私は人にお金を払って書く時間を買っているんだと思って、ぞっとしたことがありました。私にとって執筆は、食事をして排泄するような、自然な行為だったのに、もうそういう書き方は出来なくなってしまった。

**野崎** もう仕事として引き受けるしかない、ってことですよ。意識的にはかなり変わるでしょうね。

**金原** 変わりますね。そういうところを意識しなくて済むくらい、育児と家事が自然に生活の中に溶け込んでいくといいんですが。

**野崎** でも、芸術とかクリエイションって、みんなそうかもしれない。それこそ子どもって、なにも言わなくても遊ぶし、めちゃくちゃいっぱい絵を描くじゃない。文章だってそうですよね。それがあるときから、なんらかのルールに乗っかる。ただ、根っここの部分が、自然に出てきたひとだったら、形態は変わっても、矛盾ではないんじゃないかな。

**金原** どういう状況にあっても書かない生活はないと思います。それこそ、出版出来なくなったとしても書くだろうと。

**野崎** 逆に言うと、いままではなかった「子どものことを考える」脳の部分がありますよね。そこが働いているときに、同時に創作の脳のほうも、これまでとは違うように動いている感じはないですか？

**金原** 子どもといえるときの自分と、小説を書いているときの自分がどんどん乖離していく感じはあります。一日の中でいろんな顔に変えていかなきゃいけないから。

**野崎** いままで以上に、変えるっていうシフトの力が要求されるわけですよ。

**金原** 子どもといえるときはこう、ひとりではいるときはこう、夫といえるときはこう、仕事しているときはこう、というふうに人格を細分化していきながらも、確立していつているところがあって、それはむしろ快感だったりします。それまで出来なかったような事や、恥ずかしかったような事が、がんがん出来るようになっていったりして。

**野崎** 潜在能力が高まっていく状態かな。

**金原** それまでは、一日のうち半分ぐらいデスクに向かっていて、とりあえず書けるだけ書いておいて、たとえば千枚の原稿を三百枚に削るような、非効率な書き方をしていたんです。いまはプロットを立てて、スタートとゴールを決めないと書きはじめられない。そういう書き方は、いいところも悪いところもあるんですけど、受け入れていかなきゃいけないんだと思っています。



**野崎** 子どもをもつっていうのは、基本的に保守化へ向かう道ですよ。「ダメなことはダメ」と教えないきゃならない。文学の価値観でいえば、日和るイメージではありますよね（笑）。

**金原** 憂鬱な話ですね。子どもといえるときはやっぱり「これやっちゃダメ」とか「嘘をついちゃダメ」とか叱るじゃないですか。でも、小説を書くときは殺人鬼や異常者にも共感したいし、悪いものを悪いっていつ

ちゃうような人にはなりたくないし、少数派の立場に立ちたい。やっぱり人格が乖離してるんですね。

**野崎** でも、その両立で間口が広がるところはありますよね。金原さんの『アッシュベイビー』を読んだとき、本当に衝撃を受けたんです。もともとフランスの文学などが好きな連中って、過激さを求めるところがあるけれど、あれほど過激な小説もちょっとないんじゃないかって。そういう世界と、「嘘ついちゃダメ」のお母さん業が両立するのは、すばらしいですよ。「それでこそ作家だ」と思います。

**金原** ありがとうございます。でも子どもの友達のお母さんたちには読まれたくないですね……。とかいってるのが保守化の第一歩ですね。

**野崎** あはは。でもほんとうに『アッシュベイビー』が例のない小説だと感じるのは、ぼく自身が赤ん坊のことを書いてるとき、「赤ちゃんって、文学的にどういうテーマなんだろう？」と考えていたからなんです。実際問題として、赤ん坊が主要人物として描かれることはほとんどないんですよ。台詞も言わないし、動きもないわけだから。

**金原** 一人称じゃ無理ですね。

**野崎** でもあの作品では、単なる肉のかたまりとしての赤ん坊が、最後にいけばいくほど強力に迫ってくる。あれこそ赤ちゃん小説だって。赤ん坊って、おしめを換えなきゃならないし、あまりに具体的で、文学のテーマに結晶しにくいでしょう。金原さんはそれを逆にとり、素っ裸のままま転がして、あとは段ボールに入れておくという、なんの演出もないやり方をしましたよね。まさに肉がむくむくと動いている状態を描いた。

**金原** あれは、主人公が自分の非力さや間抜けさを、少しずつ赤ん坊に重ね合わせていく話でもあって、だから赤ん坊は主人公の理想であり、激しい憎しみの的でもある。いまだったらいろいろリアルに書けると思いますが、あのときはあのときで赤ん坊というモチーフをフル活用したんだと思います。

**野崎** その根源的な存在、古い文芸批評用語でいわゆる「裸形」の存在っていうやつですが、あれはほんとに裸の赤ちゃんだから、まさに裸形そのものっていうのははじめて見たなあと感じました。というわけで、ぜひ保育園のお母さんたちにも読んでいただいて。

**金原** いやです（笑）。



**野崎** 昔の日本の私小説だと、子どもができるとこれでネタが増えたとかばかり、作家はみんな書いたと思うんです。そもそも家族を書くことが、日本の近代文学の一大テーマだった。でももう成り立たないのかな。いまの新しい世代の女性作家たちには豊かな才能がそろっていると感じますが、そういうベタな家族の捉え方はもう必要ないのかな、っていうふうに思うんです。

**金原** 子どもをもたない作家の方も多いですよ。

**野崎** ライフスタイルとして、それが浸透していますからね。でも同時に、理屈抜きで心を揺さぶられるのは家族のテーマだなとも思う。

**金原** 私も『カラマーゾフの兄弟』みたいな、家族をテーマにした長篇を一生に一度は書いてみたいです。

**野崎** それは子どもができてから？

**金原** デビューしたころからずっと「いつかは家族をテーマに」っていつてきたんですけど、ずっと書けないままというか、その方向にいかないまま来てしまっ

**野崎** もちろん、自分の生活を反映して、とは発想しないでしょうけど。

**金原** でも、「悔しいけど、自分に子どもがいなかったら絶対わかんなかっただろうな」と思うこともたくさんあったので（笑）。それは活かしていきたい。

**野崎** ありますよね。それは否定できないと思うんです。「体験とはまったく無関係になんでも成り立つ」っていうことはできない。ぼくの場合、根っから単純な人間だから、昨日までの仕事をぜんぶひっくり返して「子ども中心」になったんです。小説を読んでも、子どもがどう描かれているか、子どもがどうなっていくかが気になる（笑）。『カラマーゾフの兄弟』にも、いじめられる子、それで苦しんだあげく、結局死

わからん?! 文学

Wonderful BUNGA KU

金原ひとみ+野崎 歓

新城カズマ

望月 旬々

米光一成+ナカシマカズユキ

モブ・ノリオ

斎藤美奈子

nanakikae

小池 昌代

¥0

こども  
WEB

対談

# 野崎 歓 + 金原ひとみ

**野崎** お子さんはいくつになりました？

**金原** 二歳です。髪の毛が薄いです。

**野崎** 二歳じゃ、みんなまだ薄いでしょう（笑）。

**金原** いや、きっと想像以上に薄いです。でも、外見はそんなでも、やっぱりおままごとが好きです。意外だったんですが、ほんの赤ちゃんのころから、性差を感じるものですね。押しつけてるわけでもないのに、女の子はおままごと、男の子は、車のおもちゃを「ガシャーン！」っていう感じで。

**野崎** 男の子は乗り物系だよな。うちの息子もほんとと電車が好きで。

**金原** 「うんてんちゃん」ですよな。

**野崎** そうそう、電車の運転士さんをそう呼んでましたね。

**金原** あのエピソードが載ってる野崎さんの『赤ちゃん教育』が大好きで、お会いするのがすごく楽しみだったんですよ。

**野崎** それは光栄です！ 書いてる方も楽しかったですよ。子ども自慢に終始している本ですから（笑）。でも、電車って子育てにほんとと重要なんですよ（笑）。

**金原** ちょうど「うんてんちゃん」の話を読んだころ、子どもが電車とバスを指さして「電車！」「バス！」と叫ぶようになったので、野崎さ

んの息子さんのように電車の名前をマスターして欲しい！ と思って電車カードを買い与えたんですけど、やっぱり反応しなかったですね。

**野崎** 「男と女」なんて分けたくないけど、そのくらいの歳からすでにあるんですよ。

**金原** ありますね。私は元々、「男も女も一緒だ」って考えていたんですが、夫との関係の中で割と性差を意識するようになって、更に子どもができて、赤ん坊たちにも性差があるのを見て、むしろ成長過程で男女に差はないという刷り込みがなされるのかな、と思うようになりました。

**野崎** 女の子に比べると、男って、秩序や権力を求める気もしますね。電車だって、「動く秩序」そのものじゃないですか。かたちも四角いし、定期的にやって来て動くところとか。それが男の子にはたまらないみたいね。

**金原** 野崎さんもそうですか？

**野崎** ぼくはぜんぜんそうじゃないつもりだけど、仕事でバリに行っても、毎日二時間とか、お土産に電車のおもちゃを探すようにはなりませんでした（笑）。「なんでおれ、こんなバリに来て電車ばかり探してるんだらう」と。

